失われた欲望を求めて

——『仮面の告白』におけるホモソーシャル・ナラティブ——

キース ヴィンセント
Keith Vincent

三島由紀夫の『仮面の告白』について、評論家の跡上史郎が2000年になって形容したのはこれが「同性愛文学の近代開始」だということでした。

——「ホモセクシュアル、同性愛であるということは、この性的指向が同性であるということであって、それ以上でもそれ以下でもない。『仮面の告白』こそは、このどうしようもなく同性に向かわざるを得ない性的な意識を対象化し、言語的に構築していることをもって、正しく同性愛文学と呼ぶことができるものなのである。」①

『仮面の告白』が「同性愛文学」に分類される作品だと言うのは、この小説が初めて世に出た1949年から半世紀も後の記述としては、呆気にとられるほど凡庸な説明、と言いますか、そうでなくともなんとも取るに足らない発見に聞こえるかもしれません。今日は、跡上がなぜ2000年にもなってそう言わなくてはならないと感じたのか、その理由についてお話ししたいと思います。そしてそのことが、この小説の語りと戦後日本における男同士の関係の構造について教えてくれるものについても、触れていきたいと思います。

ところで多くの日本のゲイの読者にとっては、この跡上の言挙げはなんら目新しいものではなかったはずです。もう長いこと彼らは『仮面の告白』を「ゲイ文学」の作品として読んできましたし、三島自身をも彼らのお仲間の1人だ

と決めてかかっていました。伏見憲明は自身の著作『ゲイの考古学』の中で、戦後日本のゲイの世界でカギを握る人々にインタビューすると、三島の名前が「うんざりするほど」何度も出てくると指摘しています[②]。彼のインタビューの相手たちの多くは三島の著作の衝撃について、とくに『仮面』が、ゲイ男性としての自分自身を理解する上でいかに影響を与えたかについて語りました。また大半の人たちがどこそこのバーで三島本人を見たことがあるだとか、友達のそのまた友達が三島と寝たことがあるだとかのゴシップの1つ2つを有していたそうです。伏見はそのことを「セピア色に閉ざしたゲイの過去すべてに、三島由紀夫が存在したような気持ちになった」と記しています[③]。

その後のゲイの読者たちにとっての重要性とは裏腹に、『仮面』に対する評論家たちの反応は、この小説が扱う男同士のセクシュアリティを嫌って、それを直接テーマにすることを忌避する傾向が著しかったのです。このことが、跡上が2000年にもなってなおその作品を「同性愛文学」であると敢えてあからさまに主張しなければならないと感じた理由の一つだったに違いありません。たとえば新潮文庫版のあとがきにいまも登場している1950年の福田恒存の書評でも、同性間の欲望に関してはただの一言も触れられてはいません[④]。『仮面の告白』を読んだことのある人なら、この小説に関する書評を同性間の性愛を抜きに書き抜くことがどれだけ大変なことかはわかっていただけると思います。

それでもこの小説に描かれる男性間の同性愛の問題にどうしても触れなければならなくなると、多くの評論家たちはこれを何か別のもののメタファーであると読みたがってきました。野口武彦が1968年に出した『三島由紀夫の世界』ではたとえば「三島氏はこの（戦後日本の）世界で常に所有しなければならない違和感を性倒錯者の青年に仮託して語っている」だけだと言っていますし[⑤]、小倉千加子も1989年のインタビューの中で、福田のような男性評論家

たちが『仮面』を語るときほとんどが同性愛という主題を避けて通っているとし、この話題に少しでも詳しく触れたりすると、それは自分もまたホモであるという証拠だと受け取られるかもしれないと恐れていたのだ、と分析しました[6]。

小倉のこの説には確かにかなりの真実味があります。これが1989年の発言であると気づくとさらに特別な意味も持ちます。あのころ、エイズ・パニックが起きていました。そしてそのエイズ・パニックは、男性同性愛に対するじつに猛々しいホモフォビックなパニックにつながっていましたから。

しかしこの「ホモフォビア（同性愛嫌悪）」という言葉は、批評の道具としてはあまりにもなまくらです。そう言うだけでは、三島作品への有効な解釈は生まれてきません。「ホモセクシュアリティ（同性愛）」という言葉同様、ホモフォビアという言葉もまた三島とその作品に関して多くのことを説明しようと使われてきた言葉です。しかし結果は往々にして、大して目覚ましいものではありませんでした。

『仮面の告白』における「男性同性愛」および「性倒錯」の問題に対する評論家たちの素っ気ない態度は、これについては私、来年、本を出す予定なのですが、「男性のホモソーシャル・ナラティブ」というキーワードで分析した、イデオロギーの強さの現れとして読んだ方がよいと考えています。この「男性のホモソーシャル・ナラティブ」では、男性間のセクシュアリティは「性的アイデンティティ」ではないのです。そこでは男同士の欲望は思春期に特有のある発達段階の１つとして理解されていて、つまりは「だれもが一度は通る道」であって、心配しなくても最終的には必然的に、大人になったらヘテロセクシュアリティ（異性愛）に取って変わられるんだよ、と言うわけなんですね。

ところが、跡上や最近のほかの評論家たちも言っていることですが、三島の『仮面の告白』という小説は、この発達段階説のナラティブに強く抵抗して、これは主人公の、変えることのできない本質的なホモセクシュアルなアイデンティティであると主張しているのです。ゲイ・コミュニティでそうしたアイデンティティを大切にして生きていこうという人々にとって、この小説はだからこそとても重大な、そしてなるほどある意味じつに基礎的なテキストになってきました。しかしその一方で、より広い読者層においては、男性のコミュニティとセクシュアリティとは批評的にも文化的にもそういうもんじゃないのだという相変わらずの理解がこの「男性のホモソーシャル・ナラティブ」によって蔓延しているために、こうした（セジウィックの用語ですが）「minoritizing 周縁的」な男性間の欲望はほとんど理解されてきませんでした。このナラティブはホモフォビックな働きを持ち得ますが、しかし必ずしも「ホモフォビア」という言葉が指し示すような男同士のセクシュアリティに対する根深い、反発感情・嫌悪から発しているわけでもないようです。そもそも人々の一般的理解が男性のホモソーシャル・ナラティブで決定づけられているのですから、戦後の評論家のほとんどにとっては、この小説の語り手のセクシュアリティを「同性愛」という周縁的なアイデンティティで理解して男社会から排除してしまうことより、むしろ彼をホモソーシャルな囲いの中に、男たちの中の男の地位へと呼び戻して歓迎するほうが自然だったのだと思います。

実は『仮面』の最初の２章（小説の前半と言っていいでしょう）は、本当に男性のホモソーシャル・ナラティブの制約の中にうまくはまってしまうんです。それでまたみんなこの『仮面の告白』を、ホモソーシャルな読み方で読んでしまうんですね。第１章と２章はホモセクシュアリティを、サド・マゾヒズム、マスターベーション、異性装とともに、若い主人公の性生活を構成する性的幻想および性的行動のいくつかの形態の１つとして取り扱っています。そのどれもが他のいずれかに対して際立って特権的だというわけでもなく、ナラティブ

も全体としてそれに対して道徳的判断を下してはいません。「告白」という言葉には「懺悔」という宗教的な意味も含まれますが、しかしそれにしてはこの告白は驚くくらい罪の意識からは遠い。これら前段の章で、語り手は彼自身の同性の熱愛対象についてきわめて自然に「恋人」という言葉を使っているのです[7]。要するに、この主人公はここでは多くの意味で間違いなく「異常性欲者」なのではありますが、彼が同い年の他の少年たちと特段取り返しのつかないほど違っているのだと印付けるものはあまり示されていない。「性については既に人並みの知識をもちながら私はまだ差別感に悩まずにいた」」と語り手は少年期のことを書き記しています[8]。その後第3章で彼は頭の中で断罪の声を聞くのですが、しかしその声は明らかに、彼にとっての問題はホモセクシュアルな「性的指向」に関係しているのではなく、成長の早期段階からの「卒業」に彼が失敗したことに関係していると言っているのです。事実、その声はまさに擬人化した「ホモソーシャル・ナラティブ」そのもののように聞こえます。

——「顧みてもみるがいい、お前は十五の頃、年相応の生活をしていた。十七のころも、まずまず人と方を並べて行けた。しかし二十一歳の今はどうだ。... やっとこの年になってあやめもわかぬ十九の少女との初恋に手こずっているざまだ。ちえっ、何と見事な成長だ。二十一になって初めて恋文のやりとりをしようなんて、お前は年月の計算を間違えてはしないか。それにお前はこの年になってまだ接吻一つ知らないじゃないか。落第坊主め！」[9]

この断罪は性的アイデンティティや性的指向とはなんら関係ありません。そうではなくてぜんぶ時間のことなのです。主人公が「落第坊主」であるのは、それは彼がだれであるかのせいではなく、彼がまだ為していないことのせいなのです。主人公が、自分が友人たちとは異なるアイデンティティを有しているのだと気づき始めるのは小説の後半になってからです。そこで初めて『仮面の

告白』は「同性愛文学の近代開始」の如きなにものかとしての資格を真に持ち始めるわけです。ここにきて初めて、この物語の焦点は同性を性愛対象にする主人公のその「異常な」選択へと狭められます。それはこの小説が恥にまみれた秘密として描写するものであり、その秘密のせいで彼は仮面の人生を送らねばならない、完全に孤独で惨めな状況に放置されざるを得ないのです。この小説の主人公に対して多くのゲイ男性たちが感じてきたこの尋常ならざる同一感覚 identification は大部分、最後の2章におけるこうした描写から派生していると思われます。これはつまり、いまでは「クローゼットの中」で経験することとして知られるようになった経験です。ところがこれを前半と併せ読むと、『仮面の告白』は日本の同性愛史の中の2つのじつに異なった時期をうまく跨いでいることがわかるのです。1つは男同士のセクシュアリティがまだ非常線で分断された特異なアイデンティティではなかった時期、もう1つはイヴ・セジウィックが「homosocial continuum ホモソーシャルな連続体」と呼んだものが「ホモ-ヘテロ分裂」とともに永遠に破裂してしまった時期[10]。

この小説に対する解釈も、読者の視点がどちらの時期に位置しているかによって大きく揺れ動きます。これはとても面白い現象です。評論家でロシア文学などの翻訳家でもあった神西清は典型的な前者の時期の読者でした。彼にとってはホモソーシャルなナラティブの方がしっくり来たようです。神西は、『仮面の告白』の中には、どんな男性もが共通して持っている、身に覚えのある何かが存在していると感じたのでしょう。だからこそ彼はこの作品を「ひろく世界文学を通じても珍しい男性文学（あるひは一そう端的に「牡の文学」といつてもいい）の絶品とまで呼んだのです。しかしそれはこの小説の前半部分にしか当てはまりません。神西は次のように書いています。

――「假面の告白を読んだとき、すこぶる奇異な思ひを禁じ得なかった。前半と後半とが、まるで異質なのである。さながら大理石と木とをつぎ合はした

やうな具合に見えた。前半、「私」なる主人公のペデラスト的性生活が展開される部分が実に健康で、真に男性的なみづみづしい erection と ejaculation とに満ちてゐるに反して，後半、「私」が女の世界へ出ていつてからは、もちろんその性生活が不能といふ呪ひを受けることは当然だとしても、それでは説明しがたい作品としての無力と衰弱を示してゐるやうに思へた。」[11]

逆にホモソーシャル分裂の側に立つ私たちから見ると、神西の読みはとても衝撃的です。なぜなら彼は、他の少年たちに惹き付けられる語り手の情熱を、批判もなく端から「語り手の若き男性性の現れ」であると見なしているからです。要するに、若き語り手のセクシュアリティを周縁的なアイデンティティである「同性愛」というカテゴリーで理解するのではなく、若い時ならどの男性にもありうる欲望として見ているということです。この態度は、語り手の頭の中で響いたあの声、「顧みてもみるがいい、お前は十五の頃、年相応の生活をしていた」、と驚くほどに似ています。つまり神西にとっても、若い頃の同性愛は「年相応」なのだということなのです。

ホモセクシュアリティは発達段階の1つではなく変成しようのないアイデンティティの1つであるという考え方は1980年代から90年代にかけてだんだんと流通するようになってきました。そうして「仮面の告白」を「同性愛文学」としても読む基盤はできてきたのですが、評論家たちは逆に違う議論に走ることになりました。『仮面』を「同性愛文学」の作品として読むのを拒否するだけでなく、三島自身を同性愛者だと見ることをも極力避けたのです。ある者たちは単にそれは間違いとして無条件に否定しました。たとえば三島と親の代から家族ぐるみで親交のあった村松剛は、1990年に出した三島評伝『三島由紀夫の世界』で『仮面』の中で描かれたすべてのことは自伝的に精確であるとしながらも、「性的倒錯に関わる部分を除いては」と但し書きを付けるのを忘れませんでした[12]。三島由起夫研究会報や最新の三島全集の編集者でもある佐藤

秀明は、2006年の論考の中で、主人公のホモセクシュアリティについて、出現する時を待っている深部の否認されたヘテロセクシュアリティを覆い隠すための、「仮説的なアイデンティティとして「私」が選択したと考えたほうが実情に沿っていよう」と論じました[13]。要するに、作品のなかに懸命に異性愛を見出そうとしたのです。「しかし、」と佐藤は懇願口調で書いています、「にもかかわらず、「私」が園子との性交を望んでいると言えないだろうか？」と[14]。

『仮面』の中にヘテロセクシュアリティを読み取ろうというドンキホーテ張りの願望を持つ者は佐藤1人ではもちろんありません。たとえば杉本和弘は2001年に、『仮面』の最初の2章における語り手の同性愛への注目は、narratologically 物語学的には第3章、第4章の園子との失敗した異性愛関係の「原因」としてではなく「結果」として説明できると論じています。園子との関係がうまく運ばなかったのは「公ちゃん」がホモセクシュアルだったからではないと彼は言います。むしろこの語り手は最初の2章では自分を戦略的にホモセクシュアルとして表象しているのであり、それはこの本の後半で園子との関係の完遂に失敗したことを正当化するためなのだと言うのです[15]。この物語学的論考の言い募りは、主原因としてのホモセクシュアルな欲望を排斥することになりますが、言うまでもなく評論家たちは、逆に物語学的な構造物としてのヘテロセクシュアルな欲望を、論を連ねて排斥してやるなんてことはほとんどやってこなかったといえるでしょう。

杉本や佐藤のこうした論考を読むにつけ、跡上のような評論家が2000年にもなってからわざわざ「同性愛文学」作品だという凡庸な用語を使って『仮面』の位置づけを確認しなければならなかったのか、その気持ちがわかるような気がします。事実、これらの論考が2つとも跡上の論考の後に登場してきたものだと考えれば、彼の論述はあまり影響を及ぼし得なかったようでもあります。太田翼は2005年の論考で、『仮面の告白』そのものが、後に出現してくる

杉本や佐藤などのそうした論考に対する、あらかじめの、事前防衛的な反論として読み得ると記しています。杉本や佐藤は、『仮面』の主人公から彼の欲望の資格を奪うじつに多くの巧妙な手口を用意するのですから。太田にとって『仮面』は、同性間の欲望が一過性の未成熟な現象でしかないと理解されている世界に向けて、語り手の欲望と、そしてそれ故に彼の存在とを、ゆがめずにありのまま、目に見える事実として描こうとしているテキストなのです[16]。

私はこの太田の読みにとても共感しますが、ここでは若干異なる論を考えてみたいと思います。私の理解では、三島の小説はホモセクシュアルなナラティブでもホモソーシャルなナラティブでもなく、どこかその間で浮かんでいるようなテキストなのです。他の私小説作家のように、三島は自分の主人公の性的欲望を現在において否定し得ない事実として提示します。しかし問題のセクシュアリティはヘテロセクシュアルではなくホモセクシュアルなのですから、彼としてはいまも支配的なホモソーシャルなナラティブと戦わなければならない。そのナラティブによれば男同士の欲望はアイデンティティではなくナラティブとして理解されるわけで、つまりは一過性の発達段階の１つであって最終的には規範的な「大人のヘテロセクシュアリティ」に移行していくというものです。『仮面の告白』はそうした前提に異議を唱え、主人公のホモセクシュアリティを生まれながらの、変成しようのないものとして擁護するために編み出されている。しかしそうしながら、それは本来対立するはずのホモソーシャルなナラティブから物語のスタンスを借りてしまったのです。つまり語り手の欲望の動じない非歴性を主張しながらも、その「歴史」を語ってしまうということです。この相矛盾する構造は、同時に「このようにして私は同性愛になった！」という主張と「これは生まれつきなんだ！」という主張を両方、同時にすることになります。そして、それはセクシュアリティにおける「構成主義」と「本質主義」のあいだのダブルバインドの見事な表れでもあります。これはセジウィックが近代のホモフォビックな文化に特有のものとして確認したことで、この二

つの相入れない主張から生まれたパラドックスこそは、まさに主人公の欲望の事実性、あるいは「性的指向」以上に、三島のテキストを、「ホモセクシュアル・アイデンティティ」を描いた日本で最初のものの１つに位置づけさせるのです。

なぜ私小説作家は三人称を好むのか

『仮面』が主人公のために組み立てた逆説的でハイブリッドな（合成的な）アイデンティティを理解するには、「一人称で書かれた私小説」という、この小説の風変わりな status 在り方の分析を通すのが一番でしょう。こんなにも明白に思われるカテゴリーの何がそんなに風変わりかを理解するために、日本の私小説に共通するパラメーター（特性）を思い出してみるのもいいと思います。規範的な私小説は２つの特徴によって定義されると言えるでしょう。１つは男性のヘテロセクシュアルな欲望に唯我論的に焦点を当てていること、そしてもう１つはある特異な三人称ナラティブの口調です。私小説では、男性のヘテロセクシュアルな欲望がその中心にあるということはすでによく知られているので、ここでは触れません。三人称ナラティブの口調の特異性については、しかしあまり理解されてはいないでしょう。

「私小説」という呼び名も、思うに誤解を招く命名です。たとえ作家の実体験に焦点を当てたテキストだとしても、私小説は自伝として分類は出来ませんし、そもそも主人公が「私」であることさえ稀なのです。田山花袋の『蒲団』は私小説最初期の最も影響力のある作品の１つだと広く認められていますが、物語りは三人称を使用しています。志賀直哉の作品のほとんどもそうでありますし、戦後の代表的な私小説も、たとえば小島信夫の『抱擁家族』なども同じです。エドワード・ファウラーが指摘していることですが、戦前のほとんどすべての私小説で、物語は共通していずれも「彼」と呼ばれる人物に焦点を当てて進められています[17]。みんな「彼」なのです。そこで私小説の読者は「彼」

というのはきっと作者と同じであり、その小説は「sincere うそ偽りのない」記述だと受け取るわけです。つまり作家の実体験の「告白」です。もしそうならば、さてそこで疑問がわき起こります。私小説が作家の実体験ならば、じゃあなぜそんなにたくさんの私小説作家たちがその小説の語りに三人称を選んでいるのか？　バーバラ・ミト・リードがそのあたりを論じています。「私（わたくし）」小説家たちのあいだで三人称の語りが人気なのは、それが可能にする temporal perspective（時間性）ともいうようなものと関係しているのかもしれない。ミト・リードは次のように言います。

私小説においては、時間的な焦点というのは可能なかぎりいつでも主人公が体験している瞬間そのものに向けられる。このことは、語り手が、過去の自己と現在の自己との間になんらかの変化や発展を描くことに関心が向いていないことを示している。どちらかというと、状況は逆である。過去の現実は書いている瞬間へと伸び、そこを超えてさらに読まれる推定上の瞬間にまで及ぶ。記述の焦点はフォーマティブな経験としての出来事に向けられる代わりに、その経験自体の質に向けられているのである。（The focus of the accounts is not on the events as formative experiences, so much as on the quality of those experiences.）[18]

いわゆる「私小説」の時間性は、それならばホモソーシャルなナラティブの時間性とはまさに逆です。それは発達論的でも目的論的でもありません。過去は現在のプレリュード（前奏）ではなく、そのまま現在にこぼれてくるのです。時間の体験はここでは immediate（即時的）で偶発的で断片的です。私小説は、ミト・リードによれば「ふつう、作者の人生のある区切られた期間にのみ関心を払い、特定の出来事や問題をテーマにする。自伝と違って、私小説は生涯全般に及ぶ出来事というものを扱わないし、通常、作家の人生の重大な出来事に関する包括的な記述ではない」[19]

私が論じているいわゆるホモソーシャルなナラティブは、それはたとえば漱石の『心』や鷗外の『雁』なのですが、これらが典型的な私小説とかなり違っているのは、それらが一人称を使っていることと無縁ではないはずです。大半の私小説と異なり、それらが三人称ではなく一人称の語りを使用するのは、「(語り手の) 過去の自己と現在の自己との間になんらかの変化や発展を与える」ためです。『心』の初めの2章を語る若者は、たとえば、十分に成長して年上である「先生」を超えていく自分でありたいという欲望に動機づけられています。『雁』の場合は、語り手の「僕」が他者としての女性を知ることによって友人の岡田を追い越し、近代人に成長して物事を語っているわけです。その限りにおいてこれらの小説も「成長や発達を語るホモソーシャルなナラティブと言える」と、私は考えています。

では、三島の『仮面の告白』はどうでしょう？　そうやって考えてくると、それは私小説とホモソーシャル・ナラティブの奇妙なハイブリッド（合成物）のようなのです。『仮面』は、同性に向いている主人公の欲望を表するために、私小説の非・目的論的、反・発達論的な語り手を採用しています。そうやって私小説の immediate temporality（即時的な時間性）を採用しながら、しかし『仮面』は、語り手にホモソーシャルなナラティブの一人称を保持させる。三島の一人称は、他のホモソーシャル・ナラティブと同様、常に少なくとも2つの「私」を存在させます——1つは語りのその瞬間の「私」、そして2つ目は語られる過去の「私」。彼の自己はこうして常に2つに分割されます——対して、「私小説作家」の自己は分割されたりはしません。ただし、鷗外や漱石のホモソーシャル・ナラティブでは the subject（主体・自我）のこの分割は強調されたり利用されたりし，そしてそれ故にこそ物語が発達してゆくのですが、三島のテキストではそれは最小限に抑制されています。

三島の「私」は、逆に、常に同じだったと言い張るのです——生まれ出てき

たまさにその瞬間から、語っている今この瞬間までずっと。この小説が、自分は生まれてきた瞬間のことをいまも憶えているという子供時代の語り手の主張から始まる事実を、私たちはそうした観点から読む必要があるのだと思います。彼は読者に、誕生したその日から、自分は自分を外部から眺めることができていたと伝えています。その結果、一人称の語りの形は可能なかぎりの即時性と客観性を手に入れます。それは普通は三人称の語りに典型のものです。ほとんど三人称の語り手の力を有するような一人称の話者のスタイル。それを採用することで、三島の主人公は彼の欲望の永続性と事実性の両方を見せつけるのです。

『仮面』を書くにあたって、ホモソーシャルなナラティブの引力に抗するために三島が必要としたものが、三人称が有するより一層の権威性と temporal immediacy（時間的な即時性）だったと言うのならば、じゃあなぜ三島はそもそも最初から、三人称の語りを採用しなかったのかという疑問がここでわき上がります。

私が思うに、その答えは、他の男たちを欲望する男として、三島の語り手は、heteronormative（異性愛規範主義的）な「私小説作家」のようには、自分の欲望を完璧には脱・歴史化、脱ナラティブ化できなかったからだと思います。自分がだれであるか、自分が何を欲望しているのか、それを言うために、彼は自分がどうしてこうなってしまったのかをも言わざるを得なかったのです。自分の小説を三人称ではなく一人称で語ろうと三島が選択したのは、ホモソーシャル・ナラティブの文化的支配が、男同士のセクシュアリティを、典型的な私小説作家のヘテロセクシュアリティのようには、現在において単純に異論のないものとして存在させてはくれなかったからなのでしょう。それはナラティブの中に置かれなければならなかった。同時にしかし、三島が彼の欲望を私小説作家によって行使されたと同じ存在論的権威とともに「ground（着地）」させ

るためには、彼は現在と過去との間のギャップ、語るものと語られるものとの間のギャップをできる限り減じる必要があったのです。

日本の「私小説」が男性のヘテロセクシュアル（異性愛）の欲望を議論の余地ない「自然」の事実として、不変の力として表すために三人称の語りの持つ権威と即時性とに依存していたとすると、三島の『仮面』はひどく風変わりな変種だったのです。つまり、一人称で書かれた私小説、それゆえ、1949年時点での男同士の欲望のいまださやかな、あまりにnarratable（物語に掬い取られやす）すぎる地位を反映した私小説だったのです。

小説が進むに連れて成長なり展開なりといったものが見えてくるだろうという読者の期待に、いかに『仮面の告白』が逆らうか？　それは彼の欲望が歴史的・時間的な出来事の推移の結果であると同時に、生まれつきの先天的なものであると断言することによってです。その2つを同時に断言できる表現法は、ここでは「彼ゆえ」という言葉です。近江に対する彼の初恋を語って、話者はたとえば次のように言います。

――「私が智的な人間を愛そうと思わないのは彼ゆえだった。私が眼鏡をかけた同性に惹かれないのは彼ゆえだった。私が力と、充溢した血の印象と、無知と、荒々しい手つきと粗放な言葉と、すべて理知によって蝕まれない肉にそなわる野蛮な憂いを、愛しはじめたのは、彼ゆえだった」[20]

ここでの因果関係の強調はこれ以上明快にはなり得ません。語り手の欲望のすべては「彼ゆえ」なのです。それは表向き、先天的というよりも経験の中に起源を持っています。しかし、主人公の創り上げた「一つの嗜好の体系」と呼ぶものがすべて彼が近江と出会った（偶発的な、歴史的な出来事の）結果の産物ならば、なぜ小説の最後に出てくる有名な刺青の若者（明らかな近江のコピ

ーです）のイメージが、私たちを彼の若いときの近江の記憶ではなく、液体の中の光の反射のイメージを通した、主人公の誕生の瞬間の記憶へと導くのでしょうか？　ここでテキストは、一方で欲望の歴史を提示しながら、他方では先天的な「本質」をも同時に指し示しているのです。一方で原因と結果という直線的な時間性を示唆しながら、他方では predetermination（予定論）的な円環的な時間性を見せているのです。「子供のとき以来ずっと」と、彼は第１章で次のように書いています。

――「私が幼時から人生に対して抱いている観念は、アウグスティヌス風な予定説の線を外れることがたえてなかった。いくたびとなく無益な迷ひが私を苦しめ、今もなお苦しめ続けているものの、この迷ひをもう一種の堕罪の誘惑と考へれば、私の決定論にゆるぎはなかった。私の生涯の不安の総計のいわば献立表（メニュー）を私はまだそれが読めないうちから与えられていた。私はただナプキンをかけて食卓に向かっていればよかった。今こうした奇矯な書物を書いていることすらが、メニューにはちゃんと載せられてをり、最初から私はそれを見ていたはずであつた」[21]

この一節で三島は自身の小説を、始まったときから予定されていた未来の passive transcription（受け身の記録）として提示します。もしこの「奇矯な書物」を書くことすらが彼の言うその「メニュー」に載っているのなら、そこに記録されている「私の生涯の不安の総計」にはこの本の内容も予定的に含まれているはずです。もし語り手の実際の人生の経験がこの本の内容に何の影響も与えていなかったのならば、この小説の語りを、（成長や変化の過程を語るにふさわしい人称である）一人称にする必要はいったいどこにあるのでしょう？　そんな一人称のナラティブは「全知的な」三人称の語りとほとんど違いがなくなります。つまり三島の一人称の語り手が不可能にもかかわらず切望しているのは、時間的な即時性と永続性の２つながらの可能性とともに、この

「全知性」なのです。自分の誕生のことを憶えている能力とは、自分を三人称の視点から見る「全知的な」能力そのもののことなのですから。

漱石や鷗外のホモソーシャルな語り手たちと違って、三島の語り手の欲望はヘテロセクシュアルの連続体の上には存在しません。彼の語り手は自分のホモエロティックな欲望から「育ち出る」ことはないのです。しかしまた彼の欲望は、彼自身を、フーコーが描いた近代の同性愛者の誕生のような意味での「new species（新種）」としても構成することはないのです。私が、三島の小説は同性愛文学における「近代開始」を意味しているという跡上の説に異を唱えなくてはならないと感じるのは、その意味において、です。

三島の語り手の欲望は、「性的指向」という新しい、「それ以上でもそれ以下でもない」実証主義的な近代のアイデンティティのカテゴリーの開始を意味するわけではありません。むしろそうした種類の肯定的なアイデンティティとは無縁でありつづけるのです。彼のセクシュアリティはそうして、いつか起こる「成熟」を経て規範的異性愛へとは進んでいかない代わりに、逆にまた単純にそのままでいられるというわけにもいかない。双方に否定されて、ではどうなるかと言うと、彼は、自分の欲望があらかじめ決められた、変わりようもないものだと気づくわけです。それはつまり、自分が時間の外側にいる完全な「不在」であると宣告されることなのです。このことはこの小説の最後のシーンで驚くほど明らかに示されます。「私」は園子とダンスホールにいて、そろそろ帰る時間になります。「あと五分だわ」という園子の声で、「私」は２人の逆の方に座っていた、「私」だけが気づいていた半裸の若者への夢想を邪魔されるのです。「園子の高い哀切な声が私の耳を貫いた。私は園子のはうにふしぎさうに振り向いた。」と彼は書きます。

――「この瞬間、私の中で何かが残酷な力で二つに引き裂かれた。雷が落ち

て生木が引き裂かれるやうに。私が今まで精魂こめて積み重ねて来た建築物がいたましく崩れ落ちる音を私は聞いた。私という存在が何か一種のおそろしい「不在」に入れかはる刹那を見たやうな気がした。」㉒

よき異性愛者に成長していないと彼をなじる内なる声は、先に指摘したようにまさにホモソーシャルなナラティブの声です。だとするとこの一節はホモ-ヘテロ分裂の、苦痛に満ちた存在論的ホラーストーリーになります。刺青の若者に向かう彼の欲望は時が経っても成長しきれません。その代わり、その欲望は彼を園子から、そして事実、時間の前進そのものからも永遠に引き離してしまうのです。園子から「時間」を知らされて、三島の語り手は自分の欲求する夢想から荒々しくも覚醒させられ、2つに引き裂かれ打ちのめされた気がします。その瞬間のこの痛みこそが、この小説を書くことを遡及的に動機づけたのではなかったか。私にはそう思われるのです。そしてそれは何のためだったのか？　それはこの話し手の人生と、完全だった状態の彼の欲望とを文学の力で再構築しようとする試み、同時に、ホモソーシャルな連続体から引き裂かれた自らの生傷をどうにか縫い合わせようとする試みだったのではないか。事実、跡上が正しいことを言っていて、この小説が同性愛文学の近代開始、あるいは実際に「ゲイ・アイデンティティの誕生」のような新しい「なにものか」を提示しているのだとすれば、私たちはそれが、なんと痛みに満ちた誕生だったかを憶えておきたいと思うのです。

ご清聴ありがとうございました。

[注]

①跡上史郎「最初の同性愛文学：「仮面の告白」に見る近代の刻印」『文芸研究』150：2000年9月号、362。

②伏見憲明『ゲイの考古学』（『ゲイという経験』収録）ポット出版2004年。355。

③同上　356。

④福田恒存「『仮面の告白』について」『仮面の告白』新潮文庫1987年。238-244。

⑤野口武彦『三島由紀夫の世界』講談社 1968 年。108。
⑥上野千鶴子、小倉知加子、富岡多恵子『男流文学論』筑摩書房 1997 年。
⑦三島由紀夫『仮面の告白』。(田中美代子他編『決定版 三島由紀夫全集』第一巻 2000 年)、246 頁。
⑧同上、233 頁。
⑨同上、301-302 頁。
⑩「ホモソーシャルな連続体」について、イヴ・K・セジウィック著、上原早苗・亀沢美由紀訳『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版界 2001 年を参照。
⑪神西清「ナルシシズムの運命」『神西清全集』、文治堂書店 1976 年、第六巻 490 頁。
⑫松村剛『三島由紀夫の世界』新潮社 1990 年。141 頁。
⑬佐藤秀明「自己を語る思想：『仮面の告白』の方法」『国語と国文学』83 号、2006 年。123 頁。
⑭同上、125-126 頁。
⑮杉本和弘「『仮面の告白』論：園子との物語をめぐって」松本透他編『三島由紀夫の表現』勉誠出版 2001 年。204-220 頁。
⑯太田翼「三島由紀夫『仮面の告白』論：仮構された告白」文化継承学論集 (2)、2005 年。78-88 頁。
⑰Edward Fowler, The Rhetoric of Confession: Shishosetsu in Early Twentieth-Century Japanese Fiction (Berkeley: University of California Press, 1988). 36 頁。
⑱Barbara Mito Reed, 'Chikamatsu Shūkō: An Inquiry into Narrative Modes in Modern Japanese Fiction', Journal of Japanese Studies, 14: 1988, 59-76. 75-76 頁。
⑲同上、60 頁。
⑳三島由紀夫『仮面の告白』。(田中美代子他編『決定版 三島由紀夫全集』第一巻 2000 年)、221-222 頁。
㉑同上、185 頁。
㉒同上、362 頁。

＊討議要旨

久保田裕子氏は、三島の『仮面の告白』をどう位置付けるかについては日本の中でも議論はあったが、ナラティヴの視点からとらえ直すところが非常にオリジナルで教えられることが多かったと全体的な印象を述べた。そして更にナラティヴの問題に関して、成長・発展を語る男性のホモソーシャル・ナラティヴと、男性のヘテロソーシャルな欲望を語っていく私小説ナラティヴを対峙させ、三島がそれぞれを継承しつつ脱構築して、自分なりのナラティヴをテクストの中に作り上げていったという論旨と理解したが、男性のホモソーシャル・ナラティヴと私小説ナラティヴは、このように対応するのかという点が疑問であり、これらも交錯しているのではないかと思われるので、二つのナラティヴの関係について補足説明をお願いしたいと発言した。発表者は、両者は明確に分けられないかもしれないが、違いを挙げるとすれば、現在・過去を横断して語っていることが、明治中期から末期のホモソーシャルな語りの特徴としてあり、鷗外の『雁』・漱石『こころ』もそうである。それに対して花袋の『蒲団』においては、人生の中の数ヵ月に焦点を当てて時雄の芳子への欲望を描くが、時雄の成長や変化はない。ホモソーシャル・ナラティヴにおいては、昔は男性が好きで今は女性というように欲望には個人のレベルでも歴史があり、江戸時代の男色と近代の異性への愛といったかたちでの日本の近代化の歴史的プロセスとも関係すると説明した。これを受けて久保田氏は、日本近代文学の中で成長が描かれ、その成長が異性愛に回収されるという型はよく認められるので、非常に大きな構想の論と受け止めており、大変刺激になったと述べた。続いて、谷川惠一氏より、『仮面の告白』の分析は大変明確で面白かったが、男性のホモソーシャル・ナラティヴが一人称で、私小説ナラティヴは三人称とすると、大正二年『白樺』に発表された里見弴の『君と私と』(学習院大学時代の志賀直哉

との関係を描いた小説）のように、その図式から若干外れてくる私小説もあるので、今回言及されなかった他作品をも視野に入れる方がよいのではないかとの発言があり、発表者はそうした作品についても今後の課題としたいと応答した。